

気合入った

5月合宿！ 交流センター 1万人組織化



戦後五〇年攻撃と対決しよう！

労組交流センター第七回五月合宿（東日本）が、五月六、七日の両日、静岡県・熱海市において二〇〇名を越える結集の下開催された。今合宿は、昨年一年間に培い展望を切り拓いた、「労働運動の新たな潮流」路線を、さらに拡大させる一万人組織建設へ向けて、全力を傾注していくことが確認された。五月合宿は、冒頭、労組交流センター・中野代表（動労千葉委員長）が、「戦後五〇年（一九五五年）」攻撃とたたかう労働運動をテーマに基調報告を行なった。（要旨別掲）

大震災を契機とした反動許さない

続いて、第一日目の特別講演として、軍事問題評論家の藤井治夫氏より、「阪神大震災と危機管理、有事体制について」を

受け、①、大震災で露出した自衛隊の病根、②、災害非常事態の構図、③、危機管理国家の実像、そして④、歴史の教訓について豊富な資料に基づいて展開され、その実像がくっきりと浮かびあがった。とりわけこの間、日刊でも明らかにしてきたとおり、自衛隊とは、「国民を守るのは任務にあらず」、その基本が「国防」にあるのだということが鮮明に指摘され、一層の認識を得るところとなった。

改憲攻撃と対決する視点を確立

第二日目は、それぞれ四つの分科会、「第一分科会、侵略戦争・植民地支配と戦後補償問題」、「第二分科会、五〇年目の憲法状況と労働者の権利」、「第三分科会、合同労組づくりのため」、「第四分科会、マルクス『賃労働と資本』を学ぶ」に

1万人組織建設を実現しよう！

この第七回五月合宿を期して、戦後五〇年攻撃との本格的な闘いへと突入した。

中野代表基調報告要旨

交流センターの基本的かつ組織的性格を、「四つのスローガン、三つの実践」として確立してきた。これを柱に連合を食いつき、連合八百万労働者を掌中にし指導していく力量をもたなければならぬ。その実践は、反戦闘争をたたかう労働運動であり、国鉄闘争を水路とする労働運動として凝縮できる。

反動の暗雲を断つ、よく学び、団結を固めた

方針は明確、四つのスローガンの下、交流センター一万人組織建設を必ずや実現させ、戦争と大失業の時代を迎えうち、八・一五全国闘争、さらに一・一二全国労働者集会の大成功に向けて、全力をあげた闘いへと決起することが確認された。

運動を、労働者の未来をかけた労働運動問題として取り組む。サリン・オーム真理教事件は、一言で言う宗教の仮面をかぶったファシスト集団、麻原はその著書で「日本は核武装を」、「細菌兵器で武装を」とまで述べている。本質的には帝国主義の論理だ。まさに政治支配の空白が出来てしまっている。今やそれをどちらが早く埋めるかということだ。労働者階級の力でこれら全てを粉碎することが肝要だ。

九五年の闘いをいかに闘うか。当面、一万名会員の組織化であり、五・二一の反入管闘争を突破口として八・一五集会へと突き進んでいく。闘いは、対「村山内閣」、対「JRI総連・革マル」であり、とりわけ清算事業団労働者の解雇撤回に反対する労働組合とは何なのか。八・一五は対決の場となる。

そして一二月の全国労働者集会に、今の情勢に対抗していく勢力を結集して、勝負をかけていく。

被災支援連、運動を全国に組織しよう